

高校生ヤングケアラーが担う「手伝い」の特徴  
—教育現場におけるヤングケアラーの発見に向けて—

○ 大阪歯科大学 濱島 淑恵 (003243)

宮川 雅充 (関西学院大学・009318)

キーワード：ヤングケアラー，家族介護，若年介護者

## 1. 研究目的

「ヤングケアラー」(Young Carer)とは、日本には正式な定義はないが、日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト<sup>1)</sup>では「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」とされている。先行研究<sup>1~3)</sup>では、日本においてもヤングケアラーは存在し、様々な問題を抱えるケースが少なくないことが示されつつあるが、実態把握は十分とは言えずさらなる調査が求められる。同時に、ヤングケアラーが担っているケア(家事、介護、感情面のサポート等)は日常的に子どもがしている手伝いとは異なるものであるのか、教員では家庭の内部事情(家族の障がいの有無やケア状況等)を尋ねることは難しく、教育現場における早期発見が容易ではない<sup>1)</sup>等、課題は数多く残っている。

以上を踏まえ、本研究では、著者らが実施した大阪府立高校の生徒を対象とした質問紙調査<sup>3)</sup>の結果を用いて、高校生ヤングケアラーがしている手伝いとヤングケアラーではない高校生がしている手伝いの違いを明らかにするとともに、家庭における手伝いの状況からヤングケアラーを早期に発見する可能性について議論する。

## 2. 研究の視点および方法

2016年1月~12月に、大阪府立高校の生徒を対象とした質問紙調査を実施した。10校の協力を得ることができた。調査票は、質問A~Eの5項目からなるが、本報告では、質問Bに含めた家庭における普段の手伝いの頻度(料理、掃除、洗濯、介護、精神的なサポート、金銭の支払い：4件法)と、質問Dに含めたケアの状況(要ケア家族の有無、本人のケア役割の有無とケアの頻度・時間)に着目し、両者の関連を分析した。

## 3. 倫理的配慮

「関西学院大学 人を対象とする行動学系研究倫理委員会」の承認を受け調査を開始した。

## 4. 研究結果

### 1) 回収結果と分析対象

5,749名に調査票を配布し5,671票が回収された。調査への協力が得られた5,500票のうち本報告と関連する質問に欠損値のないことを条件に分析対象(4,828票)を決定した。

### 2) 高校生が担うケアの状況

質問Dの回答結果から、以下の5カテゴリに分けられた。なお、ここでは結果は割愛するが、カ

テゴリⅢ-b-2については、週に4、5日以上のカア、学校のある日に2時間以上のカア、学校のない日に4時間以上のカアに該当するかどうかにもとづき2群に分け、計6群に分けた分析も行った。

- カテゴリーⅠ：要カア家族はいない（3,782名，78.3%）
- カテゴリーⅡ：要カア家族がいるかどうかわからない（439名，9.1%）
- カテゴリーⅢ-a：要カア家族がいるが自身はカアをしていない（313名，6.5%）
- カテゴリーⅢ-b-1：幼いきょうだいがいるという理由のみで自身がカアをしている（46名，1.0%）
- カテゴリーⅢ-b-2：要カア家族がいて自身がカアをしている（248名，5.1%）

### 3) 高校生が担う手伝いの状況

手伝い6項目の頻度の回答に主成分分析、因子分析を適用した結果から、手伝いは、「家事の手伝い」（料理、掃除、洗濯）と「特別な手伝い」（介護、精神的なサポート、金銭の支払い）に分けることができると考えられた。4件法の選択肢に対して頻度が低い方から順に、0、1、2、3点を与え3項目の得点を合計することで「家事の手伝い」、「特別な手伝い」のそれぞれについて0～9点となる得点を算出した。「家事の手伝い」は平均2.78点（標準偏差2.46点）、「特別な手伝い」は平均0.94点（標準偏差1.35点）であった。

### 4) 手伝いの状況と性別およびカアの状況との関係

手伝いの得点を目的変数、性別、カアの状況を説明変数とした重回帰分析を行った。性別については、「家事の手伝い」のみ有意な結果となり、女性の方が男性よりも有意に高かった（係数0.620）。「カアの状況」については、いずれの手伝いの場合にも有意な関連がみられた。例えば、学校のある日に2時間以上のカアを担っている者は、カテゴリーⅠを基準とした場合、「家事の手伝い」の係数が2.453、「特別な手伝い」の係数が2.615であり、いずれも高度に有意な結果であった。

## 5. 考察

ヤングケアラーが担うカアの内容は「家事」が最も多いことが先行研究<sup>1,3)</sup>で指摘されている。今回の調査結果から、家事の手伝いはヤングケアラー以外の高校生もしているが、ヤングケアラーの場合、より頻度が高いと考えられた。また、当然ながら、ヤングケアラーの場合、通常の高校生と比べ、介護や精神的サポート等の特別な手伝いをしている者が多くみられた。このことからヤングケアラーの負担はヤングケアラーではない高校生よりも大きく、彼らのカア役割は通常の手伝いとしてとらえ難いと考えられる。また、今後、教育現場におけるヤングケアラーの早期発見を見据えた場合、手伝いの状況を聞くことはひとつの選択肢であるが、家事の手伝いをしているか否かではなく、その頻度を確認する必要があることが示唆された。

なお、本報告は、JSPS 科研費 JP17K04256 の助成を受けたものである。

### 参考文献

- 1) 日本ケアラー連盟（2015）南魚沼市カアを担う子ども（ヤングケアラー）についての調査《教員調査》報告書
- 2) 北山沙和子・石倉健二（2015）兵庫教育大学学校教育学研究 27, 25-29
- 3) 濱島淑恵・宮川雅充（2018）厚生指標 65(2), 22-29